リオデジャネイロオリンピック候補！
若手選手の活躍光る

▲圧倒的な強さを見せて60kg級優勝を果たした高藤直寿

日本唯一の国際大会「グランドスラム東京」が平成25年11月29日(金)から12月1日(日)までの3日間、東京・千駄ヶ谷の東京体育館において開催された。

大会直前に、男子66kg級の海老沼匡(パーク24)、男子90kg級の西山将士(新日鐵住金)、女子48kg級の浅見八瑠奈(コマツ)、女子52kg級の中村美里(三井住友海上火災保険)、57kg級の松本薫(フォーリーフ ジャパン)ら、今夏の世界柔道選手権や昨年のロンドンオリンピック代表といった日本の主力選手の欠場が発表され(いずれもケガによる)、日本にとって、非常に厳しい戦いが余儀なくされると予想されたが、いざフタを開けてみると、初日、2日目と男女ともに全階級制覇。さすがに3日目の重量級では、男子は2階級、女子は1階級を落としたものの、大会前の予想を覆す、好成績だったと言っていいだろう。日本にとっての、このうれしい誤算は、若手選手の活躍によるところが大きい。

まず初日。世界チャンピオン60kg級の高藤直寿(東海大2年、20歳)の活躍は素晴らしかった。高藤の優勝は誤算ではないが、大会1日目にムードメーカー的な存在の高藤が抜群の内容で勝ったことで、日本に勢いがついたと言えるだろう。そして、女子48kg級で、高校3年生の新星・近藤亜美(人成高校、18歳)が優勝したのも、日本にいいムードをもたらしてくれた。

2日目もまた、20歳以下の選手の活躍が光った。男子81kg級の永瀬貴規(筑波大2年、20歳)と女子70kg級の新井千鶴(三井住友海上火災保険、20歳)だ。この2人は、"強豪"と言われる外国人選手を、素晴らしい技で次々撃破して見せ、会場を沸かせてくれた。

▲48kg級で見事な優勝を果たした高校3年生の近藤亜美

そして3日目。最後を締めくくったのは、男子90kg級のベイカー茉秋(東海大1年、19歳)だ。最終日の重量級は、日本にとって厳しい階級であり、実際に、日本代表が次々に消えていく中でのベイカーの奮闘は、日本の未来に希望をもたらす、素晴らしいものだった。

▲日本の弱点・81kg級の救世主となるか、20歳の永瀬貴規

来年はロシアでの世界柔道選手権大会があり、3年後の2016年にはリオデジャネイロオリンピックが待っている。現在20歳の選手はリオデジャネイロを23歳で迎える。ちょうど脂が乗ってくる頃だ。そして、7年後2020年の東京オリンピックは27歳、まさに選手としての全盛期と言っていいだろう。

▲70kg級の新星・新井千鶴。世界の2強を破った逸材だ

いきなりシニアの大会、しかもグランドスラムというハイグレードな大会で優勝したことで、注目度は一気に上がり、マークも厳しくなるだろう。だからこそ、おごることなく、心身を鍛えあげていってほしい。

今大会の収穫、それは、何といっても有望若手選手の台頭。選手たちの今後を、大いに注目したい。

▲19歳のベイカー茉秋には抜群の勝負勘がある

リオ世界柔道王者の高藤、本領発揮の圧勝V！

ケガをものともせず連覇達成

男子60kg級に出場した高藤直寿(東海大2年)。現世界王者、そしてIJFポイントランキング首位として、文句のつけようのない圧倒的な強さだった。弱冠20歳ながら、もはや押しも押されもせぬ、この階級世界最強の選手である。

▲60kg級決勝　高藤が肩車でキムに完勝

今大会前の11月初旬、全日本学生柔道体重別団体優勝大会の決勝戦で、東海大学の負けを決定づけるまさかの逆転負けを喫した高藤。しかもその試合で右肩を亜脱臼。普通であれば、大事をとって今大会は出場を見送るところだが、高藤のプライドが、それを許さなかった。

「世界チャンピオンらしからぬ試合をしてしまった」という悔しさから、監督に出場を直訴し、今大会への出場を決めた。

試合後「不安はあった」と、本音を口にした高藤だが、試合では、そんな不安はおくびにも出さなかった。強気の攻め。しかも、ただガムシャラというのではなく、冷静に相手の動きや技を見て的確に反応し、危ない場面はほとんどなかった。

▲60kg級決勝　高藤の大内刈は惜しくもポイントにならず

決勝戦の相手は、リオデジャネイロ世界柔道選手権大会銅メダリストのキム・ウォンジン(韓国)。今大会ではモンゴルの実力者2人を破って好調だったが、そのキムの速い動きにも完全に対応し、逆に先手の組み手、攻めで「指導2」を奪うと、残り47秒で得意の肩車を決めて完勝。「今までやっていた肩車は、相手に読まれていると思ったので、(決勝は)入り方を変えたんです」と、王者として、さらなる進化を遂げていることも、さりげなくほのめかした。

負けて強くなり、勝ってさらに強くなる。今大会で、国際大会6連覇を達成した高藤。果たして、この選手はどこまで強くなるのだろうか。

高上が二年ぶり二度目の優勝！

男子66kg級は、世界王者の海老沼匡(パーク24)が、リオデジャネイロ世界柔道選手権大会決勝での負傷が完治せず欠場。同世界選手権大会で銅メダリストの福岡政章(綜合警備保障・ALSOK)に期待がかかった。

▲66kg級決勝　チバナを攻め込む高上

福岡は良い試合をしながらも三回戦で苦杯を嘗める。三位決定戦も敗れ、メダルに手が届かなかった。

そんななか、一昨年の大会で、抜群の内容で優勝し、将来を嘱望されながらも、このところ今一つ成果を残せなかった高上が、久々に素晴らしい戦いぶりを披露。「健在」をしっかりアピールした。

高上は、二回戦から登場し、難敵チョ・ジュンヒュン(韓国)に「指導4」で勝つと、続く三回戦ではリオデジャネイロ世界柔道選手権大会銀メダリストのムカノフ(カザフスタン)を払腰で一蹴。準決勝のドラガン(フランス)に「指導2」で勝って決勝進出を果たした。

迎えた決勝戦。相手は、今年7月のグランドスラムモスクワで金メダルを獲得するなど、急成長中のチバナ(ブラジル)。IJFポイントランキングでも4位と、6位の高上より上位選手だ。柔道のタイプはしっかりと組んで技を掛けるスタイルで、日本人にとってやりにくい相手ではない。しかし、パワー、スピードに光るモノがあるチバナは強敵。チバナと高上との対戦は、決勝に相応しい、一進一退の攻防となった。

試合は、途中から徐々にペースを掴んだ高上が、チバナを背負投で二度、宙に舞わせ、優位に試合を進める。チバナの素晴らしい反応で、最後までポイントこそ奪えなかったものの、「指導」による優勢勝ち。来年開催されるロシア世界柔道選手権大会に向け、高上の復活を感じさせる優勝だった。

▲66kg級決勝　高上とチバナの対戦は、一進一退の好試合となった。

男子階級別順位表

階級	60kg級	66kg級
優勝	髙藤 直寿(東海大学2年)	髙上 智史(日本体育大学4年)
準優勝	W.KIM(韓国)	C.CHIBANA(ブラジル)
3位	木戸 慎二(パーク24)	宮崎 廉(桐蔭横浜大学4年)
	志々目 徹(日本体育大学4年)	D.LAROSE(フランス)

女子も初日3階級制覇！新進の近藤がシニア大会で初V

▲48kg級決勝　世界王者ムンクバットに近藤の小内巻込が炸裂

高3の近藤が快挙の初優勝

女子48kg級は、まさに驚きの結末だった。11月初旬の講道館杯全日本柔道体重別選手権大会まで、シニアの世界ではまったく無名だった高校3年生の近藤亜美(愛知県・大成高)が、全試合一本勝ち。しかも、ロンドンオリンピック金メダリストのメネゼス(ブラジル)、リオデジャネイロ世界柔道選手権大会金メダルのムンクバット(モンゴル)という、世界の2強を破る、大金星。輝かしい優勝を果たしたのだ。

とにかく、この日の近藤は強かった。もともと、寝技には定評があったものの、立ち技に、これといって切れる技があるわけではなく、足技を使って動き続け、相手のスキを見逃さずに抑え込むというのが彼女のスタイル。今大会はまさにそんな彼女の真骨頂だった。

ジュニアの試合ならまだしも、シニアの世界トップ選手が、ことごとく近藤の術中にはまり、ペースを奪われ、いつの間にか抑え込まれていた。

「あれよあれよ」と言う間に勝ち上がった近藤は、決勝では、世界柔道選手権大会で、日本の第一人者・浅見八瑠奈(コマツ)を破ったムンクバットに小内巻込で一本勝ち。会場に大歓声を巻き起こす見事な美技だった。

浅見の欠場により、今大会金メダルの危機と言われた48kg級に突如現れた救世主、近藤の今後に大いに注目したい。

世界三位の橋本が好調V！

女子52kg級は、講道館杯全日本柔道体重別選手権大会を制した、ロンドンオリンピック日本代表の中村美里(三井住友海上火災保険)と、現在の日本の第一人者、リオデジャネイロ世界柔道選手権大会3位の実績を持つ橋本優貴(コマツ)との対戦に注目が集まったが、中村の欠場により頂上対決は見送りに。

橋本にすれば、中村が不在の間に、第一人者の称号を不動のものにしたいところで、このグランドスラム東京の連覇は、アピールの場としては絶好の機会であり、気合い充分で大会に臨んだ。

▲52kg級決勝　橋本の大外刈がミランダにきれいに決まる

その橋本は、二回戦から登場し、得意の寝技を駆使して、ソツなく勝ち進むと、決勝では、開始わずか29秒でリオデジャネイロ世界柔道選手権大会優勝のミランダ(ブラジル)に完璧な大内刈で一本勝ち。技が決まると同時に、場内を大歓声が包み、橋本は満面の笑顔になった。

ここ1～2年で、急成長を遂げている橋本。果たして中村と橋本の実力差はどうなっているのだろうか？

次回の直接対決の機会を楽しみにしたいところだ。

宇高が悲願の初優勝！

松本薫(フォーリーフ ジャパン)が大会直前に、ケガのため欠場となり、「日本人選手の優勝は厳しい」と思われた57kg級。しかし、講道館杯全日本柔道体重別選手権大会を制した宇高菜絵(コマツ)が実力を発揮。今大会では全盛期を思わせる力強い技を連発し、悲願の初優勝を飾った。

▲57kg級決勝　宇高が大外刈でマロイに一本勝ち

昨年優勝、今夏の世界柔道選手権大会代表の山本杏(国士舘大1年)は、準決勝で宇高に「指導2」で敗退。それでも三位決定戦でクアドロス(ブラジル)を「指導3」で破り、なんとか銅メダルを死守した。

松本の代理出場となった出口クリスタ(松商学園高3年)は、リオデジャネイロ世界柔道選手権大会三位のローパー(ドイツ)を払巻込で破り準決勝へ進出。準決勝では同世界大会二位のマロイ(アメリカ)から「技有」を奪い先行したが、惜しくも腕挫十字固で逆転負け。それでも三位決定戦で世界王者のシルバ(ブラジル)に「指導4」勝ちという、将来性を感じさせる素晴らしい内容で銅メダルを獲得した。

女子階級別順位表

階級	48kg級	52kg級	57kg級
優勝	近藤 亜美 (大成高校3年)	橋本 優貴 (コマツ)	宇高 菜絵 (コマツ)
準優勝	U.MUNKHBAT (モンゴル)	E.MIRANDA (ブラジル)	M.MALLOY (アメリカ)
3位	山岸 絵美 (三井住友海上)	志々目 愛 (帝京大学2年)	山本 杏 (国士舘大学1年)
	S.MENEZES (ブラジル)	A.CHITU (ルーマニア)	出口 クリスタ (松商学園高校3年)

好調日本、2日目も2階級でV。81kg級に期待の新星現る！

▲73kg級決勝。一瞬のスキを逃さず、バンを崩上四方固に抑えた中矢

オリンピック銀の中矢が完全復活！

リオデジャネイロ世界柔道選手権大会ではまさかの一本負け。しかも投げられた際に、受身を取れずに脳震盪を起こすという屈辱の敗退を喫した中矢力（綜合警備保障：ALSOK）。その世界柔道選手権大会では、ライバルの大野将平（天理大4年）が世界王者に輝いた。

このグランドスラム東京が、再始動の大会となる中矢にとって、今大会は何が何でも優勝し「中矢健在」を強烈にアピールしたいところ。そんな意気込みで臨んだ中矢の試合内容は、まさに抜群の安定感だった。決して楽なブロックではなかったものの、一回戦のギガニ（グルジア）を崩袈裟固、二回戦のミランダ（プエルトリコ）を横四方固、準々決勝のデュプラ（フランス）を崩上四方固と、得意の寝技を駆使して危なげなく勝ち上がると、準決勝のイアルツェフ（ロシア）には、中途半端な体勢から仕掛けてきた大外刈りを、完璧に返しての一本勝ちで決勝へ進んだ。

▲73kg級準々決勝。デュプラに巴投をしかける中矢

迎えた決勝戦。相手のバン・ギーマン（韓国）はアジア柔道選手権連覇の強敵にもかかわらず、中矢はバンにまったくつけ入るスキを与えなかった。開始してわずか1分足らず、立ち技から寝技への移行の際の、ほんの一瞬のスキを逃さず、横三角から腕をくくり、そのまま状態をかぶせて崩上四方固に入って「一本」。その淀みない中矢の動きに、観客席からは感嘆の声が聞こえるほどだった。

寝技でこれほどに観客を惹きつけることは珍しいが、まさに「魅了」という言葉が相応しい。素晴らしい技術、素晴らしい勝利で、中矢の存在感を、改めて示すに十分な圧勝劇だった。

「世界柔道選手権後、自分の力がどこまで成長しているのかを確認したかった。自分がやってきたことをすべて出して、結果に繋がったので、これからも良い結果を残して、どんどんアピールしていきたい」と中矢。男子73kg級に頼もしい王者が戻ってきた。

81kg級で新星・永瀬が初優勝

▲81kg級3位決定戦。中井がホンに横四方固で逆転勝ち、3位を確保した

リオデジャネイロ世界柔道選手権大会で初代表となった長島啓太（日本中央競馬会）が初戦（二回戦）敗退。男子81kg級は、昨年のこの大会でも優勝を逃しているだけに暗雲が立ち込めた。

しかし、その81kg級で今夏のユニバーシアードで優勝し、11月の講道館杯全日本柔道体重別選手権大会も制して注目を集めていた永瀬貴規（筑波大2年）が、鮮烈な初優勝。しかも、全試合一本勝ち（三回戦は「指導4」）、準決勝は、講道館杯決勝から引き続きの対戦となった中井貴裕（パーク24）に、内股「技有」からの袈裟固で完勝。決勝でもリオデジャネイロ世界柔道選手権大会チャンピオンのピエトリ（フランス）を、豪快な足車で一蹴するという素晴らしい内容だった。この優勝で永瀬がこのクラスの第一人者に、一気に近づいた印象だ。

▲81kg級決勝。永瀬が足車で世界王者ピエトリに一本勝ち

永瀬自身は、目標を「来年の世界選手権での優勝」としており、今大会の結果で「一歩近づけた」と話している。同時に「1回の優勝だけでは『まぐれ』と言われてしまうので、2回、3回と繋げていきたい」と語るように、この階級の真の第一人者になるには、今後さらに結果を出し続ける必要があるだろう。

中井にしても、今大会では永瀬に完敗したものの、実力的には現在進行形で成長しており、返り咲きのチャンスは十分にある。そして、81kg級がこれまでのように「日本の弱点」と言われないためには、新進の永瀬を独走させないよう、中井、長島、川上ら現行トップ集団の踏ん張りが大切であることは言うまでもない。さらなる切磋琢磨に期待したい。

男子階級別順位表

階級	73kg級	81kg級
優勝	中矢 力（綜合警備保障：ALSOK）	永瀬 貴規（筑波大学2年）
準優勝	G.BANG（韓国）	L.PIETRI（フランス）
3位	R.DRAKSIC（スロベニア）	中井 貴裕（パーク24）
	D.IARTCEV（ロシア）	A.TCHRIKISHVILI（グルジア）

女子も2日連続オール金 70kg級に待望の新星登場！

▲63kg級準決勝。阿部は強豪ジョンを問題にせず。内股で快勝

世界代表の阿部が初優勝！

昨年、決勝で高校2年生の津金恵(松商学園高)に不覚をとり、優勝を逃した阿部香菜(三井住友海上火災保険)にとって、今大会は、絶対に負けられない大会。しかも、63kg級をけん引してきた会社の先輩・上野順恵が大会前に引退を表明しており、この大会は「ポスト上野」として階級第一人者を引き継ぐためにも、結果を出したいところだった。

その気持ちは、しっかりと試合に現れており、初戦(二回戦)のワタナベ(フィリピン)を内股「技有」からの腕挫十字固で勝利すると、続く三回戦のカンポス(ブラジル)を大外刈、そして準決勝では強豪ジョン・ダウン(韓国)を内股で破り、気合い十分で決勝進出。

決勝は19歳の新鋭・田代未来(コマツ)との対戦となり、昨年同様、若手の挑戦を受けるような形となった。昨年の試合を意識したのか、準決勝までの試合と比べ、少し堅さを感じさせる試合内容だったものの、巧みな試合運びで田代に「指導」を重ねさせ、「指導1」の差で勝利。会心の勝利と言える内容ではなかったが、相手に力を出させない、ソツのない試合運びは、さすが。

▲63kg決勝。阿部が払腰で田代を攻める

技のキレでは、日本随一と言われる阿部。世界柔道選手権では不運もありメダルにたどり着けなかったが、その実力は十分に持っている。来年が阿部にとって勝負の年と言っていいだろう。来年の活躍を大いに期待したい。

一方の田代は、2010年の世界ジュニアチャンピオン。高校時代に負った大ケガが心配されていたが、講道館杯、グランドスラム東京を見る限り、着実に復活し、力をつけてきている様子。ぜひ、今回のようなアグレッシブな柔道で、上位選手を脅かすような活躍をしてほしい。

▲世界2連覇のアルベアルを内股で攻める新井

新鋭・新井が強豪破り栄冠

女子70kg級は、日本女子柔道にとって非常に厳しい階級。上野雅恵(三井住友海上火災保険)が金メダルを獲った2008年の北京オリンピック以降、世界柔道選手権、オリンピックでの金メダルはなく、2012年のロンドンオリンピック、2013年のリオデジャネイロ世界柔道選手権大会ではメダルさえも獲れていないのが現状だ。

今回も第一人者である田知本遥(綜合警備保障・ALSOK)が準々決勝で敗れ、大野陽子(コマツ)は一回戦敗退、講道館杯優勝のヌンイラ華蓮(環太平洋大4年)も二回戦で敗退と、次々に姿を消していった。そんななか、勝ち上がったのが、新井千鶴(三井住友海上火災保険)だ。

▲70kg級決勝戦。開始15秒、新井がポリングにしかけた内股が「有効」に

11月1日に20歳になったばかりの新井は、一回戦のペレス(プエルトリコ)を内股で破ると、続く二回戦のズパンシック(カナダ)を横四方固、準々決勝の強敵・マルソク(ドイツ)を払腰で破って準決勝へ進出。準決勝では、世界柔道選手権二連覇のアルベアル(コロンビア)に対して「指導」を先行されるも、臆する事無く、思い切りよく内股にいき、小外刈で返そうとしたところをうまく切り返して「有効」を奪い、そのまま崩袈裟固に抑えて、世界王者から逆転の一本勝ち。

迎えた決勝では、今夏の世界柔道選手権銅メダリスト、現在IJFワールドランキング1位のポリング(オランダ)から開始早々に、思い切りのいい内股で「有効」を奪取。終盤、ポリングの怒涛の攻撃に押され気味となり、「指導3」まで取られるも、なんとかポイントを守り切って優勝を果たした。

新井はスロースターターで、エンジンがかかるまでに時間がかかるタイプだが、内股、払腰などの破壊力は十分に世界レベル。寝技にも定評があり、粗削りではあるが、そこが魅力でもある。オリンピック二連覇の実績を持つ会社の大先輩・上野雅恵の指導のもと、大きく育ってほしい逸材だ。

女子階級別順位表

階級	63kg級	70kg級
優勝	阿部 香菜(三井住友海上)	新井 千鶴(三井住友海上)
準優勝	田代 未来(コマツ)	K.POLLING(オランダ)
3位	田中 美衣(了徳寺学園職員)	Y.ALVEAR(コロンビア)
	D.JOUNG(韓国)	S.KIM(韓国)

重量3階級は大苦戦 最終日は金メダル1に終わる

▲90kg級決勝。ベイカーが大内刈でイを崩し、そのまま押し込んで「有効」奪取

19歳のベイカーが涙の初優勝

初日、2日目と4階級で優勝を果たし、好調の日本男子だったが、最終日の重量3階級は、予想通りの大苦戦となった。

90kg級は、講道館杯全日本柔道体重別選手権大会優勝の加藤博剛(千葉県警察)が二回戦のリパルテリアニ(グルジア)に内股で完敗。ケガで欠場となった世界柔道選手権大会代表の西山将士(新日鐵住金)に代わって出場した下和田翔平(京葉ガス)も準々決勝で敗れ、さらに復活が期待された、2010年、11年世界柔道選手権銀メダリスト・西山大希(新日鐵住金)も準決勝で、イ・ギュウオン(韓国)に無念の惜敗。

そんななかを決勝に勝ち上がったのが、19歳のベイカー茉秋(東海大1年)だった。シニアの国際大会初出場のベイカーは、力負けから「指導」を先行される試合もあったものの、一回戦から準々決勝までオール一本勝ち。準決勝ではリオデジャネイロ世界柔道選手権大会銀メダリスト、今大会第一シードの実力者・リパルテリアニに、「技有」を取りあった末の「指導3」で優勢勝ち。そして決勝では、連覇を狙うイ・ギュウオンとの息詰まる接戦を、大内刈「有効」で制し、快挙と言ってもいい見事な初優勝を成し遂げた。

勝敗を決めた大内刈の「有効」は、イが身体を捻って耐えたところを、さらに押し込む、まさに執念のポイントだった。

▲優勝を果たし、感極まる90kg級ベイカー

惨敗100kg級は入賞者なし

▲100kg級2回戦。世界選手権代表の小野はサモイロビッチに惜敗

100kg級はまさに「惨敗」というしかない、無残な結果だった。リオデジャネイロ世界柔道選手権大会代表の小野卓志(了徳寺学園職員)、講道館杯全日本体重別選手権大会優勝の増渕樹(旭化成)、2人のベテランは、ともに二回戦で敗退。期待の羽賀龍之介(東海大学4年)も、初戦のキム・キョンテ(韓国)の払腰で畳に叩きつけられてまさかの一本負け。残る一人の熊代佑輔(綜合警備保障・ALSOK)も、準々決勝で2009年世界王者・ラコフ(カザフスタン)の支釣込足で宙を舞った。それでも、ベスト8に残り、敗者復活戦に回った熊代だが、その最初の試合で、IJFポイントランキング5位のマル(フランス)に小外刈「技有」からの横四方固「技有」で完敗。100kg級は入賞者さえも出すことができなかった。

この階級で決勝進出を果たしたカナダのレイズ・カヨルは、日本育ちの日本大学2年生。大学に入ってから実力は急成長しており、日本にとって強力なライバルになりそうだ。

百瀬、原沢が辛うじて3位に

ある程度予想されていたことはいえ、100kg超級も残念な結果だった。

海外からの出場選手で、IJFポイントランキングベスト10以内の選手はわずか3名。しかも日本人選手にとっては、地元大会のため当然、ファイナリストが出てきてほしいと期待したが、準決勝へ勝ち進んだ百瀬優(旭化成)と七戸龍(九州電力)は、ともに決勝を前に力尽きてしまった。百瀬はIJFポイントランキング2位、巨漢のシルバに「指導3」負け。七戸も昨年のこの大会の王者で、IJFポイントランキング8位のキム・ソンミンに「技有」を取られ敗退。

▲100kg超級3位決定戦。百瀬が内股でボンボイシンから「技有」を奪う

決勝は、シルバとキム・ソンミンの間で争われ、キムが大会連覇。日本人3名が出場した3位決定戦では、期待のホープ・原沢久喜(日本大3年)が七戸を「指導4」で破り、また百瀬はボンボイシン(フランス)を会心の足車「一本」で破り、原沢と百瀬の二人が三位入賞を果たした。

上位ランカーがそれほど集まっていない大会で、しかも日本から代表4選手が出てこの成績。まさに、混迷する日本男子重量級の現状を表す結果と言っていいだろう。重量級再建には少し時間がかかりそうだ。

男子階級別順位表

階級	90kg級	100kg級	100kg超級
優勝	ベイカー 茉秋(東海大学1年)	L.KRPALEK(チェコ)	S.KIM(韓国)
準優勝	K.LEE(韓国)	K.REYES(カナダ)	R.SILVA(ブラジル)
3位	西山 大希(新日鐵住金)	C.MARET(フランス)	原沢 久喜(日本大学3年)
	V.LIPARTELIANI(グルジア)	T.NAIDAN(モンゴル)	百瀬 優(旭化成)

最終日の78kg級が振るわず 2009年以来の全階級制覇逃す

▲78kg級3位決定戦。大内刈でシエレを攻める佐藤

世界代表の佐藤が銅メダル

今夏の世界柔道選手権大会の日本代表で、昨年のこの大会のチャンピオン・佐藤瑠香(コマツ)が優勝候補の筆頭として注目を集めたが、佐藤は初戦のリ・チン(中国)戦、準々決勝のマルザン(ドイツ)戦と、勝つには勝ったものの、ともに技でのポイントではなく、「指導」の積み重ねという、いまひとつピリッとしない試合内容だった。

続く準決勝でも、IJFポイントランキング5位のジョン・ダウン(韓国)と、お互い決定的な技を出せない消極的な攻防となり、ほとんど差のない試合ながらも、佐藤の方が「指導」の累積がわずかに早く、ジョン「指導3」に対し、佐藤「指導4」となり無念の反則負け。

一方のブロックからは、今年の講道館杯全日本柔道体重別選手権大会で復活優勝を果たした岡村智美(コマツ)が準決勝に勝ち上がったものの、2009年世界柔道選手権チャンピオンのベルケルク(オランダ)との一戦では、消極的な試合展開となり、「指導」の数で上回った岡村が「指導3」で敗退。こちらも決勝進出は果たせなかった。

▲78kg級1回戦。岡村がベレンセクの内股を透かして「技有」を奪う

3位決定戦に回った岡村は、マルザンの危険行為により反則勝ちで3位が確定。佐藤はシエレ(ドイツ)に、小内刈で「有効」を先行されるも、その後、果敢に攻め込んでシエレの「指導2」を誘導、最後は崩上四方固に抑え込んで3位を死守した。

この階級の決勝は、ジョン・ダウンとベルケルクの対戦となり、序盤に支釣込足で「技有」を奪ったベルケルクが、ポイントを守り切って初優勝を果たした。

なお、今大会は2011年の世界柔道選手権大会の銀メダリスト、今夏の世界柔道選手権でも日本代表だった緒方亜香里(筑波大4年)が不在。若い梅木真美(環太平洋大1年)や吉村詩織(三井住友海上火災保険)にチャンスが与えられたが、残念ながら結果を出すことはできなかった。

日本人対決を制し田知本が連覇

注目は、ロンドンオリンピック金メダリストのオルティス(キューバ)と、昨年のグランドスラム東京でオルティスを破って優勝を果たした、日本の第一人者・田知本愛(綜合警備保障:ALSOK)。そして、このところ不振ながら、昨年は全日本女子柔道選手権大会で田知本を破って優勝を果たすなど、高いポテンシャルを持つ山部佳苗(ミキハウス)、さらに、今年の講道館杯全日本体重別選手権大会を制した朝比奈沙羅(渋谷教育学園渋谷高2年)などで、ベスト4には、この4選手が揃って進出した。

山部は二回戦がボラウデル(スロベニア)、三回戦がチン(中国)と、実力者揃いのブロックだったが、ソツのない試合で駒を進めた。

朝比奈も二回戦では世界2位のアルツァマン(ブラジル)と対戦し、見事な一本で勝ち上がった。

▲78kg超級準々決勝。朝比奈は横四方固で中国のマに快勝

準決勝は、オルティスと山部、朝比奈と田知本という対戦となったが、山部は一方的にオルティスを攻め込んで「指導4」で反則勝ち。田知本と朝比奈の一戦は、お互い有効な技はなかったものの、終了寸前に朝比奈に2つ目の「指導」が入り、「指導1」の差で決着した。

決勝は、田知本VS山部という、日本の重量級頂上対決と言っていいカード。山部の復活優勝か、田知本が第一人者としての意地を見せるか。手の内を知り尽くした両者だけに、お互いに決定的な技は出せなかったものの、気迫に勝る田知本が、山部の技を封じ込めながら、右払腰、足払などを繰り出して優位に進め、山部に「指導」を重ねさせて「指導3」で優勢勝ちした。

「調子は良くなかった。決勝で勝てたのは、勝ちたいという気持ちの差」と言い放った田知本。次の目標は、未だ為し得ていない、世界選手権での金メダル。「今度こそ」の気持ちは強く、そこまで誰にも負けるわけにはいかない。

▲78kg超級決勝戦。山部を内股で攻める田知本愛

女子階級別順位表

階級	78kg級	78kg超級
優勝	M.VERKERK (オランダ)	田知本 愛 (綜合警備保障:ALSOK)
準優勝	G.JEONG (韓国)	山部 佳苗 (ミキハウス)
3位	佐藤 瑠香 (コマツ)	Q.QIN (中国)
	岡村 智美 (コマツ)	I.ORTIZ (キューバ)